

## 業績リスト(過去3年)

* (1. 著書	2. 論文)	3. 訳書	4. 研究ノート	5. 書評
6. 調査報告書	7. その他文筆活動	8. 作品発表	9. 学会発表	10. 講義・講演
11. テレビ・ラジオ等出演	12. 公的活動	13. 研究助成採択	14. その他	

\* (1. 著書 2. 論文)は別途掲載

**萩原 昭広** (はぎはら あきひろ) [社会福祉学科 講師]

### 2023年

#### 9. 学会発表

- ・萩原昭広. 起立性調節障害の児童生徒を対象とした居場所の参加者へのインタビュー－OD児にとって居場所はどういった意味を持つものであったのか－. 日本福祉教育・ボランティア学習学会 第29回新潟大会. 新潟. 2023年11月
- ・萩原昭広. 多文化共生ワンストップ相談センターの外国人相談員に関する調査－複数の立ち位置を有する外国人相談員へのアンケート－. 日本社会福祉学会 第71回秋季大会. 東京. 2023年10月

#### 10. 講義・講演

- ・萩原昭広. 防災に関する出前授業. 豊中市立北丘小学校. 大阪. 2023年11月
- ・萩原昭広. 防災に関する出前授業. 豊中市立東丘小学校. 大阪. 2023年12月

#### 12. 公的活動

- ・市町村介護給付費支給審査会 委員
- ・市町村健康福祉サービス苦情調整委員会 委員

#### 14. その他

- ・吹田市多文化共生ワンストップ相談センター 主任相談員

### 2022年

#### 9. 学会発表

- ・萩原昭広. 学生ボランティアとの協働によるイベントの企画・開催が起立性調節障害の児童生徒にどのような変容をもたらしたのか. 日本福祉教育・ボランティア学習学会 第28回こうべ大会. 神戸. 2022年11月

#### 10. 講義・講演

- ・萩原昭広. 令和3年度自立支援型ケアマネジメント検討会議スーパーバイザー. 社会福祉法人ライフサポート協会主催研修. 大阪. 2022年1月

#### 12. 公的活動

- ・市町村介護給付費支給審査会 委員
- ・市町村健康福祉サービス苦情調整委員会 委員

#### 13. 研究助成採択

研究代表者	研究助成者	研究題目	研究年度	助成金額 (万円)	分担者 (含他所属)
萩原昭広	科学研究費 補助金 基盤研究 (C)	起立性調節障害の児童 生徒における居場所の有 用性と自己肯定感の向上 に関する研究	R2～R4	208	
概 要 (薫英研究費・無)					
起立性調節障害の児童生徒にとって日中開所されていることが多い相談機関や支援機関は活用しづらく、対人関係を築きにくい状況にあるため、他者との関わりはネットでの繋がりが主になっている子どもが多い。このような状況を踏まえ、起立性調節障害の児童生徒にとって必要な配慮がなされた居場所を開催することが、彼らにとってどれほどの効果をもたらすのかを明らかにする。また、彼らが主体となって居場所を起点とした自主活動の企画・運営を担ってもらう経験をすることで、一人ひとりの達成感の感得や自己肯定感の向上につなげることを目的とする。					

#### 14. その他

- ・吹田市多文化共生ワンストップ相談センター 主任相談員

### 2021年

#### 9. 学会発表

- ・萩原昭広. 起立性調節障害の児童生徒を対象とした居場所支援に関する実証的研究－運営主体である学生ボランティアの語りの分析－. 日本福祉教育・ボランティア学習学会 第27回埼玉大会. オンライン. 2021年11月

#### 10. 講義・講演

- ・萩原昭広. 障がい児に対する防災をどう考えるか. 令和3年度東住吉支援学校PTA講演会. 大阪. 2021年10月
- ・萩原昭広. 令和2年度自立支援型ケアマネジメント検討会議スーパーバイザー. 社会福祉法人ライフサポート協会主催研修. 大阪. 2021年2月

#### 12. 公的活動

- ・市町村介護給付費支給審査会 委員
- ・市町村健康福祉サービス苦情調整委員会 委員

#### 13. 研究助成採択

研究代表者	研究助成者	研究題目	研究年度	助成金額 (万円)	分担者 (含他所属)
萩原昭広	学校法人薫英学園	本学学生との協働による 防災意識を高めるプログラムの開発	R3	13.9	
概 要 (薫英研究費・有)					
災害時の行動などの危機管理意識を学生個々が持ち、状況に応じた行動が取れるようになることは、将来的に対人援助を担う人材として必要なスキルであるとともに、その身につけたスキルを他者に啓発していくプロセスは、学生の意識の向上に寄与するとともに、成長を実感させることにつながる。 まずは本学学生を対象とした防災に関するワークショップを開催し、そこで得られた経験や見地をもとに防災意識を高めることができるようなプロセスの開発を学生と協働して行っていく。					